

研究論文

## 「ノンケじゃない」既婚男性による 「既婚者であること」の実践

白井望人

### 要旨

女性と結婚するゲイやバイセクシュアル男性とその妻や子供との関係に注目した研究は、MOM (mixed-orientation marriage) 研究と呼ばれ、盛んに行われている。しかし、その多くが結婚した理由やカミングアウト後の夫婦関係、男性のアイデンティティに注目し、多く存在しているはずのカミングアウトしていない既婚ゲイ／バイ男性や、彼らが他の男性間のセクシュアルまたはロマンティックな関係を結ぶ際に、「結婚していること」をどう扱うかは詳しく検討されてこなかった。また、多くの研究が彼らを「異性愛／同性愛」の枠組みで解釈しており、この枠組みで捉えられない男性たちの経験が軽視されてきた。

本稿はそうした関係性を分析するためにまず、セクシュアルマイノリティによる異性愛者を指す「ノンケ」というスラングを利用し、セジウィック (2001) や竹村 (2002) の理論を援用して、ホモソーシャリティを、「異性愛的な」結婚やセックスをするかという、行為に基づく「ノンケ／じゃない」の視角で分析した。これにより、二元論的な「異性愛／同性愛」の枠組みから離れた男性たちの解釈が可能になった。その上でノンケじゃない既婚男性2名の語りを分析し、ホモソーシャリティにおける彼らの「結婚していること」をめぐるパフォーマンス的な実践を分析した。

その結果として、ホモソーシャリティ上では異性愛規範へのコミットの具合が「結婚していること」として具体的に測られることや、それがノンケじゃない男性によって「ノンケらしさ」として解釈され、既婚男性に対する性的興奮や拒絶として現れることがわかった。ノンケじゃない既婚男性はこれらの反応に対して、「既婚者であること」を隠して無標のノンケじゃない男性になったり、逆に「既婚者であること」を提示し、自らの魅力のアピール手段や「同じ境遇」の男

性と繋がる手段として利用したりしていた。

**キーワード：**

既婚ゲイ、MOM（性的指向が異なる二者の結婚）、ノンケ／ノンケじゃない、ホモソーシャリティ、異性愛規範

## 1 はじめに

日本において、女性と結婚経験のある「男に興味がある」（セジウィック, 2001, p.137）男性、いわゆる「既婚ゲイ／バイセクシュアル」を自称し、そのように呼ばれている／いたシスジェンダー男性は以前から多く存在していた。前川直哉（2017）は、大正時代の性欲学雑誌『変態性慾』から、日本ではじめて全国規模で流通し、一般書店にも置かれた（石田, 2018）ゲイ男性向け雑誌『薔薇族』の1980年頃までの読者投稿において、ゲイ男性たちにとって結婚の是非が「悩み」の主題となり続けていた様子を分析している。Lunsing（1995）が1986年から1993年の『薔薇族』を分析したところによれば、同誌編集長の伊藤文学は実際にこうした結婚を推奨し、分析対象80号分の文通欄に、761件のゲイ男性の結婚募集が掲載されていた。

こうした性的指向が異なる二者の結婚（mixed-orientation marriage: 以下MOM）の研究は様々な関心のもとで行われている。なぜ彼らが結婚するかについて、Ortiz&Scott（1994）は既婚男性へのインタビューを通して、「保守的社会化理論（conservative socialization theory）」（Ortiz&Scott, p.68）としてまとめている。この理論では、彼らの結婚は、ホモフォビアを含む社会規範の内面化という無意識的な理由と、結婚をセクシャリティに関する問題の「解決策」とみなす意識的な理由の結合であるとみなされている。Higgins（2002, 2004）も同様に、内なるホモフォビアや宗教的背景を結婚の理由として分析している。また、ローカルな文脈に注目した研究も存在する。Kissil&Itzhaky（2015）はアメリカの正統派ユダヤ教コミュニティにおける既婚ゲイ男性からの聞き取りから、自らのセクシュアリティを隠し続ける緊張を抱えながらも、女性との結婚が男性たちにとってコミュニティでの生存戦略として採用されていると述べる。加えて中国で

は、一人っ子政策の結果として親からの結婚の圧力が高まっていることや、儒教文化がセクシュアルマイノリティを含めた人々にホモフォビアを内面化させ、彼／彼女らに結婚を促している可能性が指摘されている (Xu et al., 2022, Shi et al., 2020)。

他の視点として、妻へのカミングアウト後にバイセクシュアル男性 (以下バイ男性) が夫婦関係をどう再構築するかをゲイ男性の場合と比較した研究 (Buxton, 2000) や、男性自身がどうアイデンティティを受容するのかに焦点を当てた研究もある (Percy, 2005)。Percy (2005) は、社会に蔓延するホモフォビアのために、男性たちが自らのセクシュアリティを認められず、ゲイ／バイ男性とのつながりを作れないままに女性との結婚を選ぶという分析をしている。そして、彼らが周囲にカミングアウトをした後は「健全 (healthy) で正直 (honest) な」(Percy, p. 36) アイデンティティが構築されるとしている。また、自助グループに注目し、中国国内のゲイ／バイ男性の妻である女性 (中国では同妻 (tongqi) と呼ばれている) がSNS上で自らの経験をどう解釈するか (Tang et al. 2020) や、サンフランシスコにおける妻たちの自助グループの重要性を主張するもの (Auerback & Moser, 1987) や、既婚男性のオンライングループを分析したもの (Peterson, 2000) もある。

彼らは女性と結婚し、周囲の多くの人々には異性愛者として認識されている。その一方で彼らは男性とセックスや恋愛をし、「ゲイ」を自認する者も多い (Peterson, 2000)。彼らの多くは独身のゲイ／バイ男性同様、同性に欲望を持つことが「ばれる」ことを恐れ、自らのセクシュアリティを隠す。Swan&Benack (2012) は、モノガミー規範とセクシュアリティは不変であるという規範が彼らへの批判の典拠となっていると分析する。この規範によって、既婚男性は妻などから「裏切り者」として糾弾されるだけではなく、ゲイ／バイ男性からも批判されることがある。これに加え、前川 (2017, pp.218-219) は女性との非対称なジェンダー構造のもとに男性たちの異性婚という「解決策」が図られている事実を批判している。

しかしこれらの研究は、既婚ゲイ／バイ男性が「既婚男性」としてゲイ男性／バイ男性と関わる中でどのような経験をしているのかについては踏み込んだ考察をしていない。いくつかの研究は、既婚男性のゲイ／バイ男性との性交渉やデー

トなどの交流について、結婚前後で変化がない (Higgins, 2002) としたり、妻へのカミングアウト後に増加する (Percy, 2005) としたが、男性間の交流において、「結婚していること」が具体的にどのような影響を与えるのかには注意が払われてこなかった。

また、これらの研究はSwan&Benack (2012) が異性愛／同性愛規範からも自由な場所でクィアな既婚男性の経験を読み解くことを試みた以外では、基本的に異性愛／同性愛の枠組みで既婚ゲイ／バイ男性たちの経験を分析している。そこで本稿は、既婚男性たちが他の独身／既婚のゲイ／バイ男性と比較してどのような立場におり、彼らとの交流の中で「結婚していること」がどのように影響したのかを、セクシュアルマイノリティが異性愛者を指す「ノンケ」というスラングから着想を得た「ノンケじゃない」という概念を使うことで、異性愛／同性愛の枠組みから離れた地点で解釈していく。

まずそのために、単なる (セクシュアルマイノリティから見た) 異性愛者とだけ解されてきた「ノンケ／じゃない」概念を再定義することで、異性愛／同性愛の二項対立では表せない男性たちの多様な経験を分析可能なものへとまとめ上げる。そのうえでセジウィック (2001) のホモソーシャリティ概念を「ノンケ／じゃない」の尺度で見ること、男性同士が「ノンケらしさ」を欲望する／しない概念上の場としてホモソーシャリティを再定義し、「結婚していること」と「ノンケらしさ」の関係について考察する (2節)。そして、その概念に基づいて男性にセクシュアル (または／かつ) ロマンティックな欲望を覚える既婚男性2名の語りを分析し (3節)、ホモソーシャリティの場における彼らの「結婚している」ことに対するパフォーマティブな実践の様子を考察する (4節)。最後に全体をまとめた上で、「ノンケ／じゃない」という言葉の意義を再度確認し、本研究の限界について述べる (5節)。

## 2 概念装置としての「ノンケ／じゃない」考

本節では、実際の既婚ゲイ男性の語りを分析する前段階として、「ノンケ」という言葉の定義上の意味と、その虚構性やパフォーマンス性について述べる。その後、「ノンケじゃない」という一見ただの補集合にも見える概念について、特定 of セクシュアリティを名指ししないという点から、既婚ゲイ男性を分析するう

えでの有効性を述べる。続いて、その「ノンケ」と「ノンケじゃない」という領域はどのような関係にあるのかを、セジウィックのホモソーシャルリティの分析や竹村和子の「正しいセクシュアリティ」の規範についての概念を援用することで説明する。

## 2-1 「ノンケ」という言葉の機能

まず最初に、「ノンケ」というスラングの定義とその虚構性やパフォーマンス性について考察していく。ゲイ男性向け雑誌『バディ』の1995年10月号では「夏のノンケ三昧」と題し、ノンケをテーマとした様々な特集が掲載されていた。この特集によれば、ノンケの定義は以下の様なものである。

否定の接頭辞“non”プラス `ケ。による複合語。`ケ、じゃないことを表す。`ケ、とは、「あいつ、そのケがあるんじゃないのか?」とか「俺にはそのケはないっすよ!」という具合に使われることから分かるように、ゲイであること=ゲイネス (gayness) を意味する。つまり「ノンケ」はゲイじゃない人=ヘテロセクシャル、異性愛者のことだ。同義の古義的表現では「純タチ」「純メン」。英米俗語ではstraightという。(『バディ』1995年10月号, p.28)

また、同じ特集では通信欄<sup>1</sup>担当のスタッフが、どのような文面が文通相手を探すのに効果的であるか、実際の文面を分析している。そこでは、「女にもてる」「ノンケ」などのキーワードを含んだ投稿に回送の希望が多く出ており、「ノンケらしさ」をアピールすることが男性との出会いの獲得につながるという分析がなされている(『バディ』1995年10月号, p.49)。ここには、ゲイ雑誌に出会いの募集の掲載を希望するという「ノンケらしくない」行為のなかで「ノンケらしさ」が欲望されるという矛盾が存在している。

ここから考えれば、「ノンケ」という言葉の機能は、単にヘテロ男性(・女性)を指し示すにとどまらず、「男らしさ」を演出するための装置として捉えること

<sup>1</sup> インターネット普及以前のゲイ男性の一部は、ゲイ雑誌を通して手紙等をやりとり(回送)し、出会いを獲得していた。ここで分析しているのは、雑誌に載せる自己紹介文についてである。

ができるだろう。この異性愛／同性愛の言語上での混線は、竹村和子の議論を援用することで整理することができる。

竹村は『愛について』(2002)において、近代社会が再生産し続けている異性愛規範の正体が『「正しいセクシュアリティ」の規範』(竹村, p.37)であると指摘した。この規範は、再生産のための性器結合と膣内射精を要請し、その他の性行為(アナルセックスや膣挿入しないセックスなど)を行うカップルや、セックスレスや子供のいない夫婦を「正しくない」ものとして排除する。また、終身的な単婚を規範化して合法的な異性愛を特権化し、一方で婚外子差別や、離婚・再婚に対する制限をもたらした。それに加え、この規範に違反していると捉えられたゲイ男性たちは乱交に耽溺するものとしてレッテルを貼られる(竹村, pp.35-43)。この規範は自動的に、実態を無視して、既婚者を配偶者との恋愛・セックス・生殖のイメージに結びつける。

竹村の議論に則れば、異性愛規範に適うかどうかには、異性愛者／同性愛者かは関係ない。仮にゲイやバイなどと自認する男性がいたとしても、(特に、周囲にそれを告げない場合において)一人の女性と結婚し、子どもを作ることを達成できたならば、この規範には適応しているのである。ノンケという語は上で見たように、本人のセクシュアリティと無関係に、「女にもてる」などという社会的に承認された「異性愛者(男性)らしさ」と関連付けられており、その点でセクシュアリティが「正しい」か否かの問いは、ノンケか否かの問いに近似している。ただし、「ノンケ」の男性は異性と婚姻し、性交渉をして再生産することを志向しているならば、現段階での婚姻状況は問われないため、そうした『「正しいセクシュアリティ」の規範』適応予備軍のような男性についても考えることができる点で、より視野を広げた概念と言える。

まとめれば、「ノンケ」とは、「(ゲイ男性から見た)ヘテロセクシュアルの男性」のことであるが、ヘテロセクシュアルであるということは、単に異性愛者であるということではなく、女性と(恋愛をして)結婚し、ペニスと膣の性器結合をし、膣内射精をして子どもを作るという行為を遂行すること、またはそれを志向することである。つまり、「ヘテロセクシュアル」であることにヘテロセクシュアルを「自認すること」は必要ない。「ノンケ」は具体的行為で示される異性愛規範への適応の問題なのである。つまり、誰でもノンケに「なれる」。ゲイ

を自認してもノンケにはなれるのであり、そういった男性の一部は既婚ゲイ／バイとして、「ノンケ」でありつつもゲイ／バイとしても振舞うようになる。

## 2-2 「ノンケじゃない (not straight)」概念の有効性

続いて、「not straight」という言葉の範囲やその有効性について検討する。この言葉は、Peterson (2000, p.201) から引用し、発展させたものである。Petersonは男性にセクシュアルまたはロマンティックな欲望を抱く既婚男性のオンラインコミュニティにおいて、ゲイやバイといった呼称を避けた人々の一部が自らを“not straight”と表現していたと述べる。それらの呼称を避ける理由の考察は深くなされていないが、Pearcey (2005) は「ゲイ／バイ」を名乗らずに距離を置くこうした態度をホモフォビアの内面化として解釈する (Pearcey, p. 33)。

しかし、Higgins (2004, pp.21-22) が指摘するように、既婚ゲイ／バイ男性の男女への惹かれの度合は様々である。「ノンケじゃない (not straight)」という言葉はHigginsが指摘した様々なゲイやバイを自認・自称することのない男性たちの経験や、しばしば独身ゲイにさえゲイネスを否定され得る既婚ゲイ／バイの経験を分析の俎上に載せる<sup>2</sup>。そして「ノンケじゃない」という言葉は彼らを『「正しいセクシュアリティ」の規範』に違反しているという点で彼らの経験をまとめ上げる。これは、異性愛／同性愛の枠組みで彼らを分析するには不可能な操作である。もちろん、ゲイ／バイ男性の経験の違いについては考える必要はあるが、彼らの振る舞いの「正しさ」を社会的規範に照らして判断する際により重要なのは、その時点において女性とのセックスや結婚などの「正しい」行為を遂行しているか否かなのである。また、既婚ゲイ／バイ男性の存在から分かる通り、「ノンケ」であることと「ノンケじゃない」ことは並立する。なぜなら、規範に適応すること、つまり婚姻状況にあったり、子供がいたりすることは、例えゲイ・セックスをしている（規範への違反）最中でも継続し得るからである。これは独身ゲイ／バイ男性が社会で異性愛者として振る舞いつつ、男性と交際した

<sup>2</sup> 例えば、「ロマンティックな欲望は女性にしか持たないが、セクシュアルな欲望は男性にしか持たない」と言った男性の経験を、「ノンケじゃない」という言葉は掘り上げることができる。また、本稿の範囲からは逸れるが、例えばアセクシュアル男性などの経験も「ノンケじゃない」という言葉で分析することができるかもしれない。

りセックスしたりする際にも同じことが言えるが、既婚者の「ノンケ」らしさは制度的・物質的（実子の存在）な支えがある分、より強固である。

砂川（1999）や石田（2007）が指摘する通り、日本におけるゲイ・スタディーズは輸入元のアメリカの影響を受け、アイデンティティに拘泥する余り、マイノリティの中のマイノリティについて焦点を当てることを消極的だった。既婚ゲイをはじめとして、異性愛と同性愛の連続したグラデーションのなかに生きていたり、その中を右往左往するような人々の経験を捉える必要があるとしたら、「ノンケ／じゃない」の分析枠組みは重要な意味を持つだろう。

### 2-3 ホモソーシャリティにおける「ノンケ／じゃない」男性

セジウィックは、『男同士の絆』（2001）において、イギリス文学をテキストにして「男同士の絆（ホモソーシャリティ）」の分析を行っている。セジウィックは、レヴィ＝ストロースの議論を援用しながら、男性中心的社会における結婚が一個人の男女間でなされる契約ではなく、ある集団の男とある集団の男の間でなされるものであると述べる。そして、そうした社会では女は単なる交換可能な財であり、結婚の大きな目的が二集団の男たちの絆を深めることであることを指摘する。また、人々が結婚して子孫を作っていくことは社会の維持のために不可欠であるから、その際に達成される男同士の絆も同様に社会の維持に必要となる。ここで、男同士の絆を使って男性たちを統制する方法がホモフォビアなのである。つまり、男性たちは男同士の絆が行き過ぎること、つまり同性にセクシュアルまたはロマンティックな欲望を覚え、それを実践することにより、糾弾されることを避ける必要がある。このとき、異性との結婚を選択した既婚者は結婚＝女性の交換という「男らしい行為」をしたとしてホモソーシャリティの中心に置かれ、「ホモ」や「オカマ」から最も縁遠い場所に自らの位置を確保することができる。しかし、セジウィックはこうも指摘している。

男性にとって男らしい男になることと、「男に興味がある」男になることとの間には、不可視の、注意深くぼかされた、つねにすでに引かれた境界線しかないわけだ。（セジウィック 2001, p.137）



つまり、「男らしい男」、例えば、女性に対してセクシュアルな、またロマンティックな欲望を覚え、仲間内で女性の好みを語り合い、結婚するような男性と、「男に興味がある男」の間の境界線は、きっぱりと分かれているわけではない。「男らしい」かつ「男に興味がある」男のなかにノンケじゃない既婚男性が存在している。

ホモソーシャリティの分析においては、異性愛規範が一つの重要な概念になっている。男性が女性を所有し、男同士の絆を結んでいくのは、異性愛が好ましいとされる社会規範が実際にあるからであり、それ自体は疑いようがない。しかし、異性愛規範を分析の視座として採用することは、異性愛と同性愛の二項対立を採用することであり、たとえ社会の多数がその二項対立に賛同していても（しているからこそ分析の視座として有効なのであるが）、その二項から抜け落ちる人々を捨象することにはならないだろうか。また、「ノンケ／じゃない」の条件を思い出せば、ホモソーシャリティの両極にいることと、異性愛／同性愛者であることを引き受けることには何の関連もないことに注意が必要である。ノンケじゃない既婚男性は普段は規範に適った「(ノンケの) 既婚男性」として、そして同性とのセクシュアル／ロマンティックな関係を持つ際には、ホモソーシャリティにおいてホモフォビックに糾弾される可能性を孕んだ「ノンケじゃない(既婚) 男性」として、その二項の間を動き、また戻ったりする。「ノンケ／じゃない」の概念をホモソーシャリティと接続することで、独身のノンケじゃない男性たちとは全く異なった立場の男性たちについて捉えることが可能である。

以上竹村やセジウィックの議論を参考にしつつ、「ノンケ／じゃない」概念とその有効性について議論してきた。この節で論じられたことは、ノンケじゃない男性を含むすべての男性たちが立つ権力関係の「地図」を描いたことに等しい。ノンケじゃない既婚男性たちは、時に独身の、時に既婚のノンケじゃない男性と、恋愛関係や友人関係、性関係を持って繋がる。そうした関係はどのように構築され、そのなかで「結婚していること」は彼らの関係にどう影響を与えるのだろうか。これまでの議論をもとに、当事者のインタビューデータを分析する。

### 3 ノンケじゃない既婚男性の経験の分析

#### 3-1 調査と分析について

筆者は調査前の2020年12月からTwitter（現X）やマッチングアプリを利用してノンケじゃない既婚男性と知り合い、長い時間をかけて関係を構築してきた。その上で身元を明かして調査を依頼し、了承を得られた場合にインタビューを実施した。なお、ほぼ全てのインフォーマントが（元）結婚相手にセクシュアリティをカミングアウトしていなかったため、本研究への参加検討の事実がアウトティングになり得ることを鑑み、同意書は電子ファイルで共有し、口頭やテキスト上で了承をもらった。その上で2022年7月から9月までの間に、日本で生まれ育ち、女性と法律婚をした経験のあるシスジェンダー男性のうち、これまでに男性に対してセクシュアル、またはロマンティックな欲望を抱き、恋愛やゲイ・セックスなどの形でそれら実践した男性（つまり、ノンケじゃない男性）のなかから、10名に半構造化インタビューを実施した。本稿はその内2名のインタビューデータを分析したものである。

インタビューに際しては、誕生してから現在までの人間関係やアイデンティティなどについて尋ねた。その際、中心的なテーマとして設定したのは「恋愛」「結婚」「セックス（性欲）」であり、誰／何に対して欲望したのか、その際にどのような方法をとったのかを中心に質問した。そして、特に結婚後に関しては、「結婚していること」がノンケじゃない男性との関係においてどういった影響を及ぼしたのかに注目した。こうした一見プライベートな事柄に注目したのは、セクシュアル／ロマンティックな個人的結びつきが、本人が意図するにしろしないにしろ異性愛規範や「ノンケ／じゃないらしさ」と接続されるためである。そのため、一人の男性と異性愛規範との関係性を分析する具体的な尺度として、恋愛経験や性経験、結婚の経験を聞いていくことが重要になってくる。

#### 3-2 Bさん（30代前半）の経験——「侵食される感じがあって」

Bさんは30代前半の既婚男性であり、ゲイを自認している。未就学の子どもが1人おり、同性パートナーもいる（インタビュー当時）。

Bさんは小学校から大学に至るまで、女性との恋愛について「ビビッと来ていなかった」が、「(好きな女性が) いなきゃいけないもんだ」という義務感

を感じ、好きな女性について男友達と話したり、女性とのデートなど「普通の高校生らしい恋愛的なこと」をしていた。一方で高校生の時には自慰の際に“shemale<sup>3</sup>”ものを観たり、自らの肛門をいじるなど「周り的高校生とは違う」ことを自覚しながらも、異性愛者という「普通の人」になるべく、「性的指向と恋愛指向を完全に切り分け」ていた。

Bさんの初めてのゲイ・セックスは大学時代にインターネット掲示板で知り合った男性とのアナルセックスだった。Bさんは当時のゲイ・セックス観を「自慰行為の延長」と言い切り、当時のセックス相手から交際を申し込まれたものの、Bさんはそれを断る。

当時のBさんは「ノンケらしく」なることを望んでいたため、あくまで恋愛関係には踏み込まず、ゲイ・セックスのみに「逸脱」を留めた。そして、「ノンケらしさ」から程遠い交際という相手の望みに応えなかったどころか、その男性に「なんで男が好きなの？」という異性愛規範を濃厚に引き継いだ質問を投げかけずらした。

Bさんはその後、大学卒業間際に初めて女性とセックスをし、就職後は女性とのセックスにのめり込むようになる。「そう（女性とのセックス）することによって、（…）普通の方に普通の方に、と思っていた」と述べる通り、同僚の男性達と女性とのセックスの仔細を開陳し合って周囲に「ノンケ」性をアピールし、Bさんは「ノンケらしく」なっていった。「ストレートとして生きていくぞっていう覚悟」で結婚した後、しばらく男性との性交渉は控えていたが、「自慰の延長」として発展場<sup>4</sup>に通うようになる。一旦は人間関係の齟齬の原因となった「ノンケらしさ」への欲望は、ここで肯定的に解釈される。

筆者（以下筆）：やっぱ（発展場で結婚指輪を）付けてると言われますか？

B：言われるかな

筆：どんな感じなんですか？

B：その一、興奮材料になる人がいるよね。結婚してるのに、みたいな。な

<sup>3</sup> 「女性らしい」特徴（乳房や頭髮等）がありながら、ペニスを持っている人々が出演するアダルトビデオのジャンル。

<sup>4</sup> 主にゲイ男性用に作られたクルージングスポット（不特定多数とセックスする場所）。

んだ、なんか、なんか知らんけど、どっちにもうけるんだよね

筆：どっちにも？

B：ウケしてる、ウケする時は、そう、なんか、奥さんに内緒で犯されて喜んでんのか、みたいなの。興奮材料にする人もいるし、なんか、タチしたらしたで、なんか、なんだろう、奥さん抱いた体で、抱かれるのが、みたいなのどっちも興奮材料になる人がいるみたいで<sup>5</sup>

ここで、Bさんが既婚者である事実は、『バディ』誌面で「ノンケらしさ」が欲望されていたのと同様のロジックで、性的欲望の道具として消費されている。ここでは、異性愛規範に疎外されるノンケじゃない男性たちによって、異性愛規範（女性とのセックス）を根拠にした性的欲望が表出するという奇妙な逆説が生じている。

しかしBさんは既婚者であることを性的欲望の道具として消費されていることに対し、次のようにも述べる。

B：なんか俺はそれが、かえってなんかあの、「うっせーな」って感じだったんで、だるかったから、あんまり言われなくなかった

(…)

筆：こっち（指輪に象徴される妻との関係性）の要素をこっち（性欲）に持ってくるなみたいな話？

B：そうそう、そこに触れられると要は、ちょっと侵食される感じがあって、なんか、ねえ、だから、まあ、欺瞞でしかないんだけど、そう、倫理的には明らかにヤベえから、いやでもホントそう、そこを、そこに触れられるような気がしたから、だって、そうじゃん、その、奥さんがいるのに、ケツ犯されて喜んでんのか、ってさ、普通に考えたらあの、実際そういうことをしてるわけで、それはまあ、倫理的には、アウトでしょってというのが、根底にはあるから、そこに触れられたくないがために、そういうこと言われた

---

<sup>5</sup> 「タチ」は同性同士のセックスにおける能動役であり、(男性同士のアナルセックスの場合は)アナルにペニスを挿入する方。「ウケ」は受動役であり、アナルにペニスを挿入される方。

くないから、まあ（発展場で結婚指輪を）外すとか、っていうのがあった、ちょっと自己防衛でもあった

Bさんが既婚者である事実は性的消費の道具になると同時に、Bさんの中に葛藤を生み出した。自らが欲望した「ノンケらしさ」は結婚という制度的保障に基づいており、その結婚制度はBさんの「規範的でない」性行為（同性間・不特定多数）を強く咎める。Bさんはそのストレスに「侵食される」のを回避するために結婚指輪を外し、単なる「ノンケじゃない男性」として振舞うことを選択した。

その後Bさんは「完全に体の相性が合う人」とのセックスを求め、婚姻状況を隠してSNSでセックス相手を募集するようになる。時に既婚者であることを理由に関係を絶たれたり、性的に興奮されたりすることを経て、そこで出会ったのが、現在の同性パートナー（独身）だった。その男性と定期的に会っていくうちに、「恋愛指向と性的指向」が「分けきれなくなってしまう」、Bさんは既婚者であることを明かした上で交際を申し込む。パートナー男性は幼少期に両親が離婚しており、「(Bさんの子どもに)自分みたいな思いはさせたくない」という理由で告白は一度断られるものの、最終的には交際することとなり、関係は一年以上続いている。

そうした状況でBさんは、「気持ち悪さが耐え切れなくなってきた」ため、妻に現在の状況をカミングアウトし、離婚協議をしている（インタビュー当時）。「正直に生きていきたい」と述べるBさんは、「ここ2、3年のうちに」「性自認がゲイだっていうのを明確に自分で認め」、求められれば「隠さず（ゲイであることを）話すように生きていこうと思っている」と決心している。このように自らのゲイ／バイとしてのセクシュアリティが妻などに露呈した上での結婚生活について論じるものはMOMの研究に多い（Buxton, 1994; Buxton, 2000; Pearcey, 2005等）。また、論文ではなくインタビュー記事などにおいても、ノンケじゃないことが妻や周囲に露呈していることを前提としているものが多い<sup>6</sup>。しかし、筆者の2年以上に及ぶ観察からは、ノンケじゃないことを周囲に秘匿している既婚者や、ゲイ／バイのいずれも自認しない当事者がかなり多くいると思われる。そ

<sup>6</sup> 例えば、『東京の生活史』におけるインタビュー（岸編 2021, pp.811-818）など。

うした彼らの経験はどう解釈されるだろうか。

### 3-3 Gさん（40代後半）の経験——「ノンケの男の人に惹かれるからです」

Gさんは40代後半の既婚男性であり、自らをゲイとバイの間で「針が振れるような」セクシュアリティだと感じている。未就学児から高校生までの子どもが4人いる（インタビュー当時）。

小学生の時は恋愛感情をあまり感じたことがなく、中学生になると学校に好きな女性ができる。しかし並行して男性器に対する興味があった。大学に入ると、女性に告白したり、交際したり、セックスする一方で、「自分に持ってない」ものを持つ男性に惹かれ、時に性的欲望を覚えることもあったが、「同性に対するそういう感情っていうのは、なんかまずいこと」だと思い、そうした「ノンケじゃない」欲望を公言したり、他のノンケじゃない男性と繋がることはなかった。

その後大学院進学を経て就職するが、女性と家庭を築く「憧れ」があったため、婚活サイトを経て30代前半で一度目の結婚をしたが、一年半で離婚する。その一方で、男性への性的欲望はあったため、20代後半になるとインターネット掲示板経由で男性との性的行為を募集することになる。結婚後も掲示板で募集を続けたGさんは、そこで既婚者であることを明かすか否かについて次のように語る。

筆：そのときは、結婚してることは言ってないんですか

G：言ってなかった時もあるし、言ってた時もあった

筆：それは何の違いがあるんですか？

G：自分の、その時の、募集をする時の気分だと思います

筆：気分？既婚って載せるとなんなんだ

G：なんかリアクションがいいのかな、とかそんな打算的なことを考えてた

筆：リアクションがいいんだなあ、いいかなって、思うっていうこと自体が、なんかそれを見たんですか？具体的に。既婚者が称揚されてることを

G：僕自身が、ノンケの男の人に惹かれるから、だと思います

筆：それはつまり、既婚者がノンケってことですか？

G：っていう風に、なんか、興味を持ってくれる人がいるかな、と思って。

そういう打算的なことが働いてる (…)

筆：既婚者って書いたら、向こうがノンケだと思ってくれて、それがまあ、釣り針というか、魅力になる、からって思った？

G：そうです

既婚者と書くと「リアクションがいい」と考える理由に、Gさんは自らが「ノンケの男の人に惹かれる」からだと答える。また別の場面でGさんは「ノンケっぽい人」の方が「とっかえひっかえいろんな人とやって」「ないって思われる」のではないかと推測している。ここでは『パティ』誌面で見られたように、既婚者であることが「ノンケらしさ」として欲望されるほかに、結婚していることが『正しいセクシュアリティ』の規範のもとで異性愛やモノガミー規範と自動的に接続されており、それを既婚男性側も理解し、運用している様子がわかる。Gさんの目論見は実際に当たり、既婚者を好むノンケじゃない男性から連絡が来たこともあった。

Gさんはその後、再婚して子供をもうけ、40代になるとインターネット掲示板からSNSにノンケじゃない男性とのつながりの場をシフトした。SNS上ではごく最初を除いて性的関係の募集はせず、プロフィールに既婚者であることを表明しつつ「今まで自分の中にため込んできたいろんな思いを正直に」書くことを目的に、セクシュアルな話題に限らない発信をするようになった。そうした発信の中でアップロードする自らの写真について、Gさんは次のように述べる。

G：だって自撮りするときにこうやって、(結婚)指輪写るように、撮ったりするもん

筆：あ、意識してるんですか

G：するする

筆：なんで

G：え、なんか、ブランドブランド

筆：え、なんか調整してます？写るように

G：あの、トリミングをして、写っちゃいけないところを切るじゃない、その時に指輪は入るようにしてる

筆：なんか指輪を映さないことと、映すこと、何が違うんだろうなあ

G：まあそれは自分がブランドだと思ってるってことと、うん、あとでもそれで、あの、そういうなんか打算的なやましい気持ちもあるけど、その一方で、なんか同じような境遇で同じ悩みを抱えている人が、そういう指輪を付けてる僕をみて、で、それをきっかけで僕の投稿を遡ってみてもらって、ああ、同じようなことを考えてる人がいるなあっていう風にこう、気づいてくれたらいいなあ、っていう、そういう同じ同士を、とつながりたいって思っている。別にかっこつけて言ってるわけじゃなくて、うん

Gさんは「ブランド」と称される既婚男性の「ノンケらしさ」を、文字情報だけでなく結婚指輪をカメラに写すことで演出する。その一方で、Gさんは Peterson (2000) が見たような、ノンケじゃない既婚男性の自助オンライングループの役割をSNSに見ており、「自分のモヤモヤした気持ち」を吐露し、共感してもらうことで「消化」しようとする。そのなかでも、「同じような境遇」で「同じ悩み」を持つようなノンケじゃない既婚男性と経験を共有するために自らの指輪を写して、自らが既婚者であることをアピールしている。なお、このSNS上でもGさんは既婚者であることや、それに連想される「父」や「年上」であることに関連する性的な興奮や「落ち着いた感じ」などといった肯定的評価を受けている。

Gさんは自らの立場のために批判的な言葉を浴びたことについて、「時々はあるけど、そんなにない」と述べる。これはおそらく、既婚者であることを表明しているために、批判的な人々と接触する機会があまりないことが大きな要因だろう。

#### 4 考察

ここまで、2名のノンケじゃない既婚男性の語りを分析してきた。本節では、本稿の目的を振り返りつつ分析を整理し、本稿の意義について述べる。本稿の目的は、異性愛／同性愛の二項対立では捉えづらい、ノンケじゃない既婚男性の存在を、「ノンケ／じゃない」という概念にまとめ上げて説明することと、その概念を用いて彼らが他のノンケじゃない男性との関係において、結婚していること



をどのように取り扱っているのかについて説明することであった。

分析から明らかになったことは次の二点にまとめられるだろう。

まずは、ノンケじゃない既婚男性のホモソーシャルリティにおける複雑性である。彼らのセクシュアリティを知らない人々、例えば友人、同僚、そして妻や家族は、自動的に彼らを異性愛者だと認定する（少なくとも、同性愛者ではない）だろう。その認定にセクシュアリティの自認が一切関係しないのは、竹村の述べた「規範的なセクシュアリティ」の条件から明らかであり、その点で彼らは「ノンケ」である。しかし、男性への欲望という点で、彼らの行動は確実に「規範的」ではない。彼らはゲイ・セックスを行ったり、男性への性的欲望を開陳したり、ゲイバーに行ったり、男性と恋愛したり、ゲイであることを引き受けたりすることがある点で「ノンケじゃない」。つまり、既婚ゲイはどちらも本当の自分として分裂しているのであり、どちらも「偽装」ではありえない。アイデンティティ概念をはじめて提示したエリクソン（1973）は、自らが何者であるかについての自分での認識（個人的同一性）と、他者や社会がどう考えているかについての自分の認識（社会的同一性）が統合されるとき、アイデンティティが安定するという「統合仮説」（上野 2005, p.7）を唱えたが、「ノンケ／じゃない」という相反するアイデンティティは、統合されない場合も多くある。Bさんは「切り分け」の戦略を取り、「ノンケじゃない」ことへの深入りを避けつつ結婚した。Bさんは最終的には離婚しゲイであることを引き受けるが、それまで「ノンケじゃない」こと、つまり同性への欲望を捨てきれずに、ノンケじゃない既婚男性としてゲイ・セックスを繰り返した。Gさんも自らのセクシュアリティをゲイとバイ（女性への欲望）の間に「針が振れるよう」と述べており、どちらの欲望もGさんの嘘偽りない欲望だろう。こうした彼らの状況や、彼ら自身のことを「同性愛／異性愛」や「ゲイ／バイ／ヘテロセクシュアル」などの既存の区分法で分析することは困難である。

そして二つ目の点は、その「ノンケ」らしさ、つまり結婚していることが、「ノンケじゃない」男性たちとの関係のなかで様々な応答を生み出し、それに既婚男性が様々な方法で対処していることである。具体的には拒絶や肯定（性的欲望）の反応があった。Bさんは「奥さん抱いた体」として性的に欲望される経験をし、Gさんも同様の欲望に加え、父親役割や「落ち着いている」ことをその身

体に読み込まれた。逆に、Bさんはその「ノンケらしさ」を理由に関係を絶たれたり、交際を断られたりすることもあった。その反応への応答としては、ここでは隠蔽や内面化などの方法が取られた。また、好意的な反応については、既婚者本人が意図していない場合に、本人を困惑させることがあった。Bさんは結婚していることに対する意図しない性的欲望に「侵食される感じ」を受け、発展場において結婚指輪を外したり、その後プロフィールに既婚者であることを書かないことで、既婚者ではない無標の「ノンケじゃない男性」となることを試みた。一方でGさんは自らが「ノンケの男の人に惹かれる」と述べ、自らの「ノンケらしさ」を主張する手段として既婚者であることを表明することを選択した。ここでは、セジウィックが指摘したように結婚することによって「男らしい男」になり、ホモソーシャルリティのなかで評価されるという規範をGさんが内面化し、他のノンケじゃない男性へアピールする際の資源として活用している様子がわかる。加えて、Gさんにとって既婚者であることを示すことは、他のノンケじゃない既婚男性と経験を共有し、「モヤモヤした気持ち」を「消化」するためのきっかけとして使われている。

## 5 おわりに

ノンケじゃない既婚男性を扱ったこれまでの研究は、妻にカミングアウトした上で夫婦間の関係や、ノンケじゃない既婚男性当人のアイデンティティに重点を置いた分析を展開してきた。本稿はその中で注目されてこなかった、家庭の外でのノンケじゃない男性同士の関係の中で、結婚していることが既婚男性たち自身にどのように扱われるかに注目した。その前提として、セジウィックのホモソーシャルリティの分析と竹村和子の『『正しいセクシュアリティ』の規範』の分析を接続し、正しいセクシュアリティの規範へのコミット度合によってホモソーシャルリティにおける「男らしさ」が変化することを示した。インタビューの分析から、そうしたホモソーシャルリティにおいて、ノンケじゃない既婚男性が他の独身のセクシュアルマイノリティから身体を区別されていることがわかった。そして、既婚男性本人も、既婚者であることを隠したり、逆に規範を内面化して「既婚者ブランド」をアピールするなどして、そうした区別に対応する様子を明らかにした。

彼らは果たして「ゲイ」なのだろうか、「バイ」なのだろうか、それとも「ノンケ」なのだろうか。こうしたカテゴリーの区分の基準は恣意的であり、何を「異性愛者」で、何を「同性愛者」とみなすかは人によって異なる。こうした男性たちの経験を解釈する際の解決策の一つとして本稿が提案するのが、「ノンケ／じゃない」という言葉によって男性たちをみる視角であった。この言葉は、一旦本人の自認を不問にし、行為の問題で男性たちをみることで二項対立的な枠組みでは語ることの難しかった男性たちに光を当てる。

伊野（1997）は、ゲイ・スタディーズが「セクシュアリティ・アプローチに偏りがち」であることを批判し、ジェンダーの視角を取り入れることで、「ゲイ・スタディーズの脱ゲットー化」（伊野, p.44）を目指した。本稿は、女性蔑視を経由して成立するホモソーシャリティの分析を下敷きにはしているものの、あえて男性同士の関係性に注目した。そのため、結婚を成立させるために必要である女性たちの視点や、ケア労働の分担などの問題でノンケじゃない既婚男性とは非対称な経験をしているであろう、ノンケじゃない既婚女性（いわゆる「既婚レズビアン」「主婦レズ」）の視点については更なる分析が必要だろう。

また、独身のノンケじゃない男性たちによる既婚ゲイ男性への視点に関しても、既婚者からの語りによる記述に終始してしまったため、今後の課題として取り組みたい。その際には、既婚者に敵対的な視線を向ける人だけではなく、同性婚の法制化が裁判で戦われている今の時代に、「あえて」異性婚を望むノンケじゃない人々についても考える必要がある。

## References

- Auberback, S. & Moser, C. (1987). Groups for the Wives of Gay and Bisexual Men, *Social Work*, 32(4), 321-325.
- Buxton, A. P. (1994). *The other side of the closet: the coming-out crisis for straight spouses and families*. USA: Wiley
- Buxton, A. P. (2000). Writing Our Own Script. *Journal of Bisexuality*, 1(2-3), 155-189.
- Erikson, E. H. (1971). 『自我同一性——アイデンティティとライフサイクル』(小比木啓吾, Trans.). 東京: 誠信書房. (Original work published 1959).
- Higgins, D. J. (2002). Gay Men from Heterosexual Marriages, *Journal of Homosexuality*, 42(4), 15-34.
- Higgins, D. J. (2004). Differences Between Previously Married and Never Married 'Gay' Men, *Journal of Homosexuality*, 48(1), 19-41.
- Kissil, K. & Itzhaky, H. (2015). Experiences of the Marital Relationship among Orthodox Jewish Gay Men in Mixed-Orientation Marriages, *Journal of GLBT Family Studies*, 11(2), 151-172.
- Lunsing, W. (1995). Japanese Gay Magazines and Marriage Advertisements, *Journal of Gay & Lesbian Social Services*, 3(3), 71-88.
- Sedgwick, E. K. (2001). 『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(上原早苗, 亀澤美由紀, Trans.). 愛知: 名古屋大学出版会. (Original work published 1985).
- Ortiz, E. T., & Scott, P. R. (1994). Gay Husbands and Fathers: Reasons for Marriage Among Homosexual Men, *Journal of Gay & Lesbian Social Services*, 1(1), 59-72.
- Peterson, L. W. (2000). The Married Man On-Line. *Journal of Bisexuality*, 1(2-3), 191-209.
- Pearcey, M. M. S. (2005). Gay and Bisexual Married Men's Attitudes and Experiences: Homophobia, Reasons for Marriages, and Self-Identity. *Journal of GLBT Family Studies*, 1(4), 21-42.
- Swan, T. B., & Benack, S. (2012). Renegotiating Identity in Unscripted Territory: The Predicament of Queer Men in Heterosexual Marriages. *Journal of GLBT Family Studies*, 8(1), 46-66.
- Tang, L., Meadows, C., & Li, H. (2020). How gay men's wives in China practice co-cultural communication: Culture, identity, and sensemaking, *Journal of International and Intercultural Communication*, 13(1), 13-31.
- Xu, W., Huang, Y., Tang, W., & Kaufman, M. R. (2022) Heterosexual Marital Intention: The Influences of Confucianism and Stigma Among Chinese Sexual Minority Women and Men. *Archive of Sexual Behavior*, 51, 3529-3540.
- 石田仁 (2007). 『戦後日本における「男が好きな男」の言説史: 雑誌記事にみる表象とそれを支える解釈枠組みの変容』[未公開博士論文]. 中央大学.
- 石田仁 (2018). 「ゲイ雑誌、その成り立ちと国立国会図書館の所蔵状況」『現代の図書館』, 56(4), 196-204.
- 伊野真一 (1997). 「セクシュアリティとジェンダーの軋轢: ジェンダー・コンシャスなゲイ・スタディーズに向けて」『ソシオロゴス』 21, 44-58.
- 上野千鶴子 (2005). 「脱アイデンティティの理論」『脱アイデンティティ』 1-41. 東京: 勁草書

房.

岸政彦編 聞き手：太齋慧 (2021).「これが自分の幸せなんだって思う、イメージができたし。自分のセクシュアリティを受け容れつつも、幸せにやっていけるのかもしれない」『東京の生活史』811-818. 東京：筑摩書房.

砂川秀樹 (1999).「日本のゲイ／レズビアンスタディーズ」『Queer Japan』(1), 135-153. 東京：勁草書房.

竹村和子 (2002).『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』東京：岩波書店.

『パディ』, 1995年10月号, 東京：テラ出版

前川直哉 (2017).『〈男性同性愛者〉の社会史——アイデンティティの需要／クローゼットへの解放』東京：作品社.

## Abstract

**Performance of “Being Married” by “Not *Non-ke*” Married Men**

Mito SHIRAI

This paper aims to explore how gay/bisexual married men (do not) use their marital status to manipulate other gay/bisexual men’s impression of married ones when they have romantic or sexual relationships with other gay/bisexual men who are single (and married), using the colloquial term “*non-ke*” to signify heterosexuals. Several studies, called MOM (Mixed Orientation Marriage) research, focuses on gay/bisexual men who marry women and their relationships with wives and children. Much of this research has illustrated the reasons for marriage, post-coming-out marital relationships, and identity issues. Therefore, there is a remaining gap in understanding of closeted married gay/bisexual men. Specifically, there is limited research on how they handle “being married” when having sexual or romantic relationships with other men. Additionally, previous studies tend to interpret their experiences within the binary framework of “heterosexuality/homosexuality,” overlooking the experiences of such men that cannot be captured within these frameworks. To analyze their behaviors, this paper first utilizes “*non-ke* (straight),” which is the slang term referring to heterosexuals by sexual minorities in Japan. Drawing on Sedgwick (2001) and Takemura’s (2002) theories, this study revisits the concept of homosociality from the perspective on “*non-ke*/not *non-ke*” based on actions engaging in “heterosexual” marriages and sex. This perspective allows for an interpretation of men who fall out from the binary “heterosexual/homosexual” framework. Following this standpoint, the narratives of two married men who identify as not *non-ke* are then demonstrated such as how they handle their “being married” when they approach other not *non-ke* men.

Initial research reveals two contradicting methods of the management of “being married”. Within the context of homosociality, the degree of

commitment to heterosexual norms, explicitly manifests as “being married”, and this status is interpreted as “straightness”, even if the married men have romantic/sexual desire for other men. This commitment is found to be a cause of rejection or sexual interest from other men who identify as not *non-ke*. In response to these reactions, these married men may choose to conceal their marital status and become (“ordinary”) *non-ke* or, conversely, present their married status as a means to appeal to other not *non-ke* men and attempt to build a bond with the men in the same situation.

**Keywords:**

married gay men, MOM (mixed orientation marriage), not/ “*non-ke*” (straight), homosociality, heteronormativity

